

琉球大学学術リポジトリ

講演 「ニューカレドニアの日本人 ー痛ましいエピソードー」

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: クルトビッチ, イスメット, Kurtovitch, Ismet メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010145

ニューカレドニアの日本人—痛ましいエピローグ—

イスマット・クルトヴィッチ

(歴史家、ニューカレドニア政府公文書館館長)

1941 年 12 月 8 日、ニューカレドニアの小さな村の村長室で、公式の会議が開かれる。壁にはド・ゴール將軍の肖像が飾られ、マリアヌヌ（訳注：フランス共和国の象徴）の胸像も置かれている。村長は、すべての日本人の逮捕を命じる電報を何度も読み返す。戦争状態にある国の間での、この古典的なできごとは、いまだにニューカレドニア人の集団的な記憶をよびさます、一連の不正義と、人の、そして家族の悲しみを予想させる。

実際、この逮捕は個人に対しては手荒く、彼らの家族に対しては何の考慮もなく実施される。数時間の間に、数百人の日本人が妻子と離れ離れになることを余儀なくされ、オーストラリアの収容所に送られる。ニューカレドニア当局は収容期間を終えた彼らの帰還要求を拒んだため、彼らは 1946 年に日本へ強制送還されることになる。

この戯曲は、孤独と隣人からの恥辱に直面した、ヨーロッパ人ないしメラネシア人の妻たちの悲嘆を呼び起こす。夫の財産を奪われた彼女らの人生は困難をきわめた。

より悲劇的だったのは、一夜にして、そして大多数にとっては永遠に、父親を奪われた数百人の混血の子どもたちの運命である。日本語の名前とともに生き、そして成人し、彼らは父親、さらには彼との別れという悲しい記憶を持ち続け、伝えてきた。

ニューカレドニアを第二の祖国とし、離れ離れになった子どもたちとの記憶のなかで残りの人生を送った男たちの嘆きと悲しみも記憶にとどめなければならない。

今日、日本人の血を引くニューカレドニア人は、カナダやアメリカ合衆国にならってフランス政府がやらなければならない謝罪と思いやりの表明を静かに待っている。

この戯曲は、この太平洋の歴史の一コマを証言し、また表舞台に出すために書かれた。
(大石太郎訳)



写真 1：シンポジウム風景

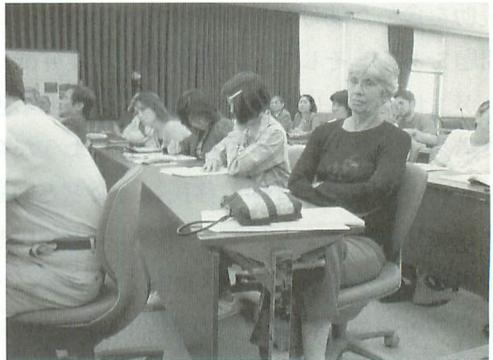


写真 2：シンポジウム風景